

第 1 7 期第 1 回青森県生涯学習審議会 会議概要

日 時	令和 6 年 1 2 月 4 日（水） 9：45～11：15
場 所	青森県庁南棟 5 階 教育委員会室
出 席 者	《 委 員 》 敬称略 1 3 名 島守 詩子 吉川 康久 米田 大吉 小寺 将太 岡 詩子 岩本 ヤヨエ 米沢 美幸 小笠原 秀樹 工藤 貴子 越村 康英 松浦 淳 高砂 充希子 山崎 結子 《 事務局 》 8 名 小舘 孝浩（生涯学習課長） 西塚 努（学校地域連携推進監・課長代理） 工藤 奈保子（生涯学習課 企画振興グループ 総括主幹） 中村 尚吾（学校教育課 課長代理） 他 4 名
内 容	1 開 会 2 教育長挨拶 3 会長、副会長選出 4 県教育委員会からの諮問について 5 青森県生涯学習審議会について 6 案 件 （1）諮問内容について （2）その他 7 閉 会
配 付 資 料	次第・青森県生涯学習審議会委員名簿・座席図 <資料> 1 青森県生涯学習審議会設置条例 2 青森県生涯学習審議会について 3 諮問書 4 青森県生涯学習審議会・青森県社会教育委員の会議スケジュール 《参考資料》 1 第 1 6 期青森県生涯学習審議会答申 2 令和 6 年度青森県の社会教育行政

会 議 の 内 容

1 開 会

(内容省略)

2 教育長挨拶

(内容省略)

3 会 長、副 会 長 選 出

事務局より、互選により会長、副会長を選出することを説明。

事務局案として会長に越村康英委員を、副会長に吉川康久委員を提案し、全委員の賛同を得て選出された。

【第17期青森県生涯学習審議会】

会 長：越村 康英（弘前大学教育学部 准教授）

副会長：吉川 康久（青森県教育支援プラットフォーム東青地区実行委員会委員）

4 県 教 育 委 員 会 か ら の 諮 問 に つ い て

風張教育長が、諮問事項を読み上げ、越村会長へ諮問書を渡す。

5 青 森 県 生 涯 学 習 審 議 会 に つ い て

(事務局から説明)

6 案 件

会長 まずは、案件（1）諮問内容について事務局より説明をいただきたい。

(事務局から説明)

会長 事務局の説明に対して質問があれば伺いたい。

(委員からの質問等はなし)

会長 それでは、各委員から自己紹介と諮問書に対する御意見をお話しいただきたい。

委員 小学校の校長をしている。諮問に関連して、日頃感じていることをお話させていただくと、先日のPTAでも、学校と家庭・地域との関わりが薄くなってきており、そのことが様々なことに大きな影響を与えているという話をした。家庭の状況としては、コロナ禍の影響もあつてのことだと思うが、学習発表会や参観日等で学校に足を運ぶ機会があつても、自分のこどもの活動を見て、すぐに帰ってしまう家庭が多く見受け

られる。また、地域では、子ども会がなくなったり、町内会活動の主な参加者が年配の方になっていたりして、こどもたちが地域とつながる機会が少なくなっている。学校としては、地域のお祭り等の機会を通じてつながりをつくっていきたいと考えているが、昨今の働き方改革の流れもあり、教職員の負担増加につながる取組について慎重にならざるを得ない状況もある。また、こどもたちが自分たちで、あるいは友達と関わりながら問題を解決できないケースがかなり増えていると感じている。多くの自治体では、週末ごとに様々なイベントが行われているが、ただ単にイベントを開催するだけではなく、いかにこどもたちと地域との交流を促進していくかが、課題だと考えている。学校でも道徳や総合的な学習の時間を通じて地域とつながる機会を増やしているが、こどもたちの地域に対する意識を前向きなものに変えていくことも課題だと考えている。学校として関われることをいろいろ学びながら、議論を深めていきたい。

委員 普段は一般企業で働いているが、学校のキャリア教育を支援するため、地元企業と学校とをつなげる活動に関わっている。今回の諮問では、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」が大きなテーマとなっているが、コミュニティの認識が、世代間によって大きく異なっているように思う。若い世代においては、いわゆる地域コミュニティのようなものではなく、インターネット上でのコミュニティというものが割合的には多くなっていると思うので、そういった若い世代に、実際に暮らしている地域に目を向けさせるのは大きな課題だと感じている。ただ、逆に言うと、地域での活動経験がなければ、その分大きなインパクトを与えられる可能性もあるので、そのことについても検討していきたい。また、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」を進めていく上で、例えば、本県の代表的な特産品のリンゴにしても、ただ単に「生産量が全国1位」や「味がおいしい」ということだけでは、リンゴと関わりが薄い人にとっては誇りにはなり得ないと思う。そういったことをどれだけ自分事として捉えられるようにできるかが大きなポイントであり、特に審議事項2「こどもたちの主体的な地域活動の促進について」では、重要になってくると思う。審議事項の中で難しそうなのは、1番の「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進について」であり、公民館が実施しているソフト面についていろいろ検討していくことになるので、深掘りできるとよい。

委員 NPOで、県の婚活の支援事業やこどもの居場所づくり事業、地域づくりのサポート等の活動に取り組んでいる。審議事項1では「こどもたちの継続的な地域学習の推進」に関わる内容となっているが、そもそもその地域で暮らしている大人の地域愛に疑問があるのに、人口減少という課題の解決をこどもたちの地域学習に結びつけるのは現実的に難しく、地域の担い手教育が進んでいない現状では、かなり高いハードルが設定されていると思う。また、審議事項2では「こどもたちの主体的な地域活動の促進」に関わる内容となっているが、意識の高い人間を育てれば育てるほど、そういった人は県外、さらには世界に飛び出して活躍するようになると思うので、大人の関わり方としては、「自分たちのために地域を担ってほしい」、「自分たちの老後の面倒を見てほしいから地域に残ってほしい」といったことなど、大人の側の下心がこどもたちに見透かされないようにしなければならない。審議事項3の地域の仕組みづくりに関しては、多くの自治体では、地域課題の解決を担ってくれる中間支援組織の育成が進んでいるが、そういった人たちに対する予算面での継続的なサポートは保証されていないのが現状である。そのため、地域とこどもたちの意思疎通を仲介できる、

意識の高い中間支援組織をつくらなければ、いつまでたっても単年度で事業はやるけれども、その結果何も残らないことになってしまう。事務局が想定していない意見を含めて、青森県の課題の解決につながる本質をついた意見を述べていきたい。

委員 一般社団法人の代表を務めており、下北地域、特に東通村を拠点に大学生向けのインターンシップのコーディネート等の活動を行っている。諮問に関しては、二つ意見を述べさせていただく。一つ目は、審議事項1に関して、各市町村の実情に応じた対応策を考えた方がよい。人口の少ない自治体の中には、社会教育施設の代表ともいえる公民館が存在しないところも見受けられるので、各自治体の実情に応じた施策を提言することが大事になる。二つ目としては、審議事項2・3と関連すると思うが、やはり企業でも団体でもNPOでも、お互いがウィンウィンの関係になるような施策を考えていかないと学習事業は提供できないと思う。私事としては、私自身が暮らす自治体の商工会の会長に就任しており、その地域では、210ほどの企業・事業所があるのだが、後継者がいたとしても、後継者として成長できないまま廃業に追い込まれるケースが多く見受けられる。地域の企業・事業所の育成といった点を考えると、これまでは行政、あるいはNPOが主体となって進める取組が多かったと思うが、そこに地域の商工団体や企業を巻き込んでいければよいと考えている。今回で3期目となるが、率先して意見を発言できればと思っている。

委員 何年か前に委員を務めていて、今回はそれ以来の委員就任となる。私自身が暮らす地域の任意団体に所属し、仲間と一緒に地域のCMをつくるなどの地域活動に関わっている。つい最近の話では、比較的新しい、地域にある閉校後の小学校の校舎を活用して、公民館のような地域の居場所づくりに取り組んでいる。審議事項3の「地域活動の土台となる拠点づくり」に係る内容だと思うので、活動の中で得られた知見をつなげて発言できればと思う。また、若者の県外流出について、私個人としては悲観的には見ておらず、中長期的なスパンで考えたときに、どこかのタイミングで地元に戻って来られれば、それでいいと思っている。そもそも問題として捉えるべきだと思っておらず、問題として捉えるのであれば、どのくらい県外に出ていけば問題として捉えるべきなのかといった点について考える必要がある。そういった点について、私自身もいろいろ勉強しながら深く掘り下げられるとよい。

委員 地元で男女共同参画や地域づくりに関係する活動に関わり、かつてはご当地ヒーローを活用したまちづくりを実践していた。最近、防災関係の活動にも関わっており、その中では、主に中学生を対象とする避難所運営訓練と地域の女性防災リーダーの育成に取り組んでいる。中学生への防災教育の中では、「君たちはもう大人に守られるだけの存在じゃないんだよ、地域の中の立派な一員であって、地域の中の大きな力になっているんだよ。」という話をよくしている。そういったことの積み重ねが、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」につながると考えている。また、先ほど、優秀な人材ほど県外に出ていってしまうという話が出ていたが、我々地域の大人は、志のあるこどもたちを県外、そして世界に向かって羽ばたかせるのが務めだと考えている。そして、地元に残った人たちは、県外に出ていった人たちが再び戻ってきたいと思えるような地域をつくり、情報発信していくことが重要である。世界に羽ばたいていった青森県出身者が自慢できるような地域づくりを進めていきたいと考えている。

委員 青森県PTA連合会の副会長を務めている。私自身は県外出身であり、県外を知っ

ている分、青森県を愛する心については人一倍強い思いを持っている。先ほど、リンゴの話が出ていたが、県内に移住し、初めて青森県産のリンゴを食べたときの衝撃は今でも忘れられない。そのように、県外を知っているからこそわかる青森県の良さについてもたくさんあると思っている。PTA連合会では、地域の祭りの歴史や由来など、神秘的な話を聞かせていただくことがあり、地元においても気付かないこともたくさんあると感じている。私自身の話になるが、一番年長のこどもが県外で暮らしていることもあり、やはり若い人たちには地元に残ってほしいという思いが強い。地域ではバトントワリングの指導をしており、以前、生徒から就職は地元に残るという話を聞いて、うれしく思ったことがあり、地域に残るこどもたちを育てていくことも、地域の大人の大事な役割だと考えている。地域の活動場所については、こどもたちがもう少し気軽に勉強などで使える場所があるといいので、公民館等の施設の在り方についても考えていきたい。

委員 ラジオ放送を行うNPOを運営しており、インターネットのラジオで自分達の思いを伝えることで、主体的に行動できる人を増やしていきたいと考えている。また、青森市をはじめ県内外で活動する人にインタビューして情報を発信しているとともに、インタビューを受けた人が次は語り手として別の方へ思いを伝えるという連鎖をつくり、地域を元気にしたいと考えている。地味かもしれないが、そういった活動を15年以上続けている。諮問に関しては、青森県が抱える少子化という課題を完全に解決することは難しいと思う。現在の若い世代が、地域に誇りを持てるようにするには、地域の大人の在り方が重要であり、それは経済面、そして精神面が豊かである姿を若い世代に見せることで大きな影響を与えられると考えている。また、中間支援も同様に重要であり、地域と若い世代を効果的に結び付け、地域の思いを若い世代に適切に伝えていかなければならない。そういった取組を地道に続けていくことが課題の解決に少しずつ近づけていくことになる。普段の仕事の中では、企業の事業継承にも関わっており、持続可能な仕組みづくりは重要な視点である。企業の支援につながるものという言い過ぎかもしれないが、地域の取組に企業の関わりをこれまで以上に強くする必要を感じている。

委員 青森家庭教育アドバイザーを務めている。先日、娘たちが通っていた小学校が60周年を迎え、その式典に出席してきたが、生徒数がかかなり減っていることに加え、特別支援教育に関わる支援員が多くなっている印象を強く受けた。その学校は、早い段階からコミュニティ・スクールに取り組んでおり、その話し合いの中では、地域の人と生徒の挨拶を含めたコミュニケーションがうまくいっていないという話があり、当時から地域とこどもたちとの関係が希薄になっていることを感じさせるやり取りだった。現在は、ねふた愛好会もなくなり、その関係はさらに希薄になっていると思われる。やはりコミュニケーションの基本は挨拶だと思うので、そういったところから、こどもたちと地域とのつながりを考えていかなければならないと感じている。

会長 私からも意見を述べさせていただきたい。今回の諮問を受けて最初に思い浮かんだのは、大鰐町の「OH!!鰐 元気隊」や「OH!!鰐 元気隊キッズ」である。その活動の経緯は、リゾート開発に失敗した町の将来を不安に思った地域の大人が、地域の良さをこどもたちに伝えたり、町の特産品をこどもたちと一緒につくって東京に売りに行ったりする活動を始めたというもので、地道に活動を続けた結果、初期のメンバーが地域を支える大人に成長している。その中には、一度県外に出たが、Uターン

で地元に戻ってきた若者もあり、駅前でカフェを開業したり、ねぷた運行を再開したりしている。今回の審議会においては、そういった県内の取組からもしっかりと学び、知見を得ながら、最終的な提言をまとめていければと思う。また、今回の諮問では、「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくり」が大きなテーマとなっているが、捉え方によっては、こどもたちの内面に立ち入るような側面を持ち合わせていると考えている。そのため、こどもたちの気持ちや考えにしっかりと寄り添うことが重要であり、決して大人の側からの一面的な愛着や誇りを押し付けるようなことをしてはいけない。そういった押し付けは、ともすると排他的な愛着や誇りにつながる危険性があり、そのことを私自身、肝に銘じながら2年間の議論に参加させていただく所存である。会長として、至らない点もあるかと思うが、精一杯力を尽くしていきたい。

委員 大学で客員研究員及び非常勤講師を務めている。他には、県の青年国際交流機構や障がいのあるこどもたちを対象としたサッカー教室で活動をしている。青年国際交流機構での活動では、参加者に日本の良さに気付くタイミングを尋ねると、外国人との交流を通じて新たな気付きや発見があるといった話を耳にする。また、私自身、県外出身者であるが、実家に戻ると、青森県の空気のきれいさを実感することがしばしばあり、県外出身者であるからこそその気付きを強く感じている。また、こどもたちの発達に関して意見を述べさせていただくと、こどもたちの成長には、こどもたちから影響を受ける大人の関わりが重要である。オンラインを含めて、そういった大人と出会える場面をつくり、学び合いの機会を増やすことで、地域への愛着が培われていくと考えている。審議の中では、公民館における活動を含めて、親や教員以外の地域の大人との交流の場についても議論を深めていきたい。

委員 県外の大学で非常勤講師を務めている。本業は建築家として活動しており、かつては8年間アメリカで暮らして、建築について学んだり、建築に関係する会社で働いたりしていた。青森県内の地元に戻ってきてからは、大学の講師を務めて、海外の教育のエッセンスを取り入れた授業を実践する傍ら、アーツスペースで「アーティストインレジデンス」という活動をしており、海外のアーティストに1ヶ月くらい滞在してもらい、最後に展示会を開催してもらっている。ポートランドの写真家が滞在した際には、地域の祭りに参加する中で、ビジネスと切り離されている日本の祭り文化に驚いていたことに加え、地域のこどもたちとのワークショップを通じた交流の場面もあった。その中では、大人が自分の価値観をこどもたちに押し付ける教育をするのではなく、逆にテーマだけを与えて、自由にのびのびとやらせる方がこどもたちは成長することを実感できたので、これからの教育における重要な視点になると考えている。最近では、建築家としての活動の一環で、バーチャルリアリティ内にセラピーのお墓をつくる取組をしており、テクノロジーの力を実感している。青森県のような地方でも、テクノロジーの力を取り入れることで、人口が少なくてもできることは増えていくと思う。しかし、その一方で、テクノロジーが万能なわけではなく、対面から得られる知見も重要なので、公民館を始めとする社会教育施設では、やはり人と人が触れ合うワークショップのような学習機会を提供することが重要である。両者を組み合わせることによって、東京のような都会よりも、地方の方が先入観や偏見にとらわれない、グローバルとローカルを組み合わせた新しい教育を実践できる可能性を秘めていると思う。青森県には多くの自然の恵みがあり、そういったものを生かした幅広い視点からの教育を展開できると、小さな国の日本でも、世界で活躍できる人材を育てることができると考えている。

委員 県内の自治体で町長を務めている。私自身は東京で育ち、30代になってから青森県内に移り住んだ。東京での生活を振り返ると、社会教育的な学習機会に参加したことはほぼなく、地域のお祭りに参加したこともない。県内に来てからは、青年会議所に所属していた時に、こどもたちの地域愛を育むための活動に関わった経験があるが、様々なところで同様の活動が行われている割には、地元に残る若者は増えていない状況があり、矛盾のようなものを感じながら活動していた。東京で暮らしていたころは、歌舞伎やミュージカルなどの舞台観賞によく足を運んでおり、そういったものを含めて、幅広く様々なことに触れる機会が多いことに若者はひきつけられていると思うが、現在はオンラインを活用することで、地方にいても参加できる機会は増えている。青森県では、無料で受けられる社会教育的な学び合いの機会が多いと思うので、行政が関わることで、地方だからこそ広がる学習機会についても本審議会において議論していきたい。

会長 委員の皆さんから本当に貴重なご意見をいただいた。それぞれの委員がお持ちの知見を組み合わせ、本県ならではの提言をまとめていければと思う。

会長 それでは、案件（２）その他に入る。事務局から今後のスケジュールについて説明していただきたい。

（事務局から説明）

会長 その他、意見が無ければこれで今日の会議を終了とする。

7 閉会

（内容省略）